

アメリカン・ボード日本ミッション音楽教育史

安 田 寛

一 緒 言

一八一二年にマサチューセッツ州で登記された海外伝道法人、アメリカン・ボード・オブ・コミッションナイズ・オブ・フォーリン・ミッションズが一八六九年に開始した日本伝道の中で行われた讚美歌を中心とした教育活動とその関連事項とを、伝道の開始から、日本ではじめて音楽学校が作られた一八八七年あたりまでを区切りとして叙述したいと思います。

これまで日本の讚美歌教育の歴史について書かれたものは驚くほど少ない⁽¹⁾。その理由の一つは、讚美歌がこれまで主として文学史の方面から研究されてきたことに求められるのかもしれない。研究の関心は、もっぱら日本で出版された讚美歌集の書誌研究に集中していたようである⁽²⁾。

それだけではない。讚美歌教育史については、これまで大きな誤解が存在しているらしい。例えば、唱歌史の研究に一時代を画した『唱歌教育成立過程の研究』⁽³⁾でも、「外国の音楽を教育につかった学校はあったろうか。キリスト教関係の団体がつくった学校で讚美歌がうたわれたのは、いうまでもない。しかしこういう学校のなかには、たとえ

ば北陸女学校のように、時期は明治十年代末期になるが、音楽取調掛による唱歌普及とは無関係に、西洋の唱歌を教え、すすんでオルガンの奏法も教えていた学校があった。しかし、これは例外的な存在である」と述べられている。

「例外的な存在」とされてきたため、音楽史の方面から讚美歌史を研究しようとする意欲が希薄であったに違いない。山住氏が言われるように讚美歌を教え、オルガンの奏法を教えたキリスト教学校が果たして例外的存在であったのか、稿が進むにつれて自ずと明らかになるであろう。

さらに、唱歌史の研究にとっても讚美歌史の研究が不可欠であることは、拙著『唱歌と十字架』⁽⁴⁾ですでに明らかにしたつもりである。また、拙稿「L・W・メーンソンの再来日計画とアメリカン・ボード日本ミッション」⁽⁵⁾は、日本ミッションの宣教師とボストンの宣教本部書記との往復書簡を使って、文部省お雇い音楽教師メーンソンとアメリカン・ボード日本ミッションとの緊密な繋がりについて、これまで知られていなかった事実をあきらかにしたものであった。

よく知られているように讚美歌集の研究の成果は明治初期讚美歌集の復刻に結実している。このような流れの中で、若山晴子氏の「明治初期讚美歌に関する史料蒐集―米因伝道会宣教師文書に見る―」⁽⁶⁾と「ウィリアム・ウィリス・カーティス師の生涯」⁽⁷⁾は、復刻版「讚美歌并楽譜」の解題として書かれたという性質上、内容がカーチスと彼が編集した讚美歌集に関する事歴に限られているが、ミッションの原文書を使って日本の讚美歌の歴史を書いたものとして極めて新鮮な印象を与えた。また、越川美都子氏の『明治初期讚美歌研究』⁽⁸⁾は、日本ミッションが一八七五年に発行した週刊紙『七一雑報』の記事を主な材料にして讚美歌史を記述した貴重な論文である。

アメリカン・ボードの宣教師の書簡、本部から宣教師に宛てた書簡、議事録、年報などから構成されるミッション文書の研究が近年同志社大学人文科学研究所で蓄積されてきた。また、吉田亮氏の日本ミッションの各種議事録の翻

訳のおかげで、日本ミッションの歴史については、正確にその詳細が分かるようになった。このような基礎研究の進展によって、今日、宣教師文書という一次資料を使った讚美歌の歴史が書ける条件が整ってきた。

同志社大学人文科学研究所の宣教師文書研究の成果は近年中に刊行される予定と聞いているが、その一部を先取りする形で、讚美歌教育史に関する部分について、ここに発表することをお許しいただいた。よって、拙稿は、すでに触れた若山氏、吉田氏の他、茂義樹、本井康博、坂本清音の各氏の研究に多くのものを負いながら、アメリカン・ボード日本ミッションの文書を使って書かれた最初の日本讚美歌教育史となるであろう。

讚美歌は文部省の唱歌の基礎となり、その唱歌は後に台湾、韓国、中国といった東アジアで西洋音楽の流れを汲む近代音楽が形作られるとき深刻な影響を与えた。言い換えると、この地域の音楽の近代化は、まず讚美歌によって始まり、次いで日本の唱歌の影響を受けることによって行われた、という歴史を踏ると、この研究は、讚美歌と唱歌に關して東アジアの近代音楽史を研究するとき、一つの基礎を提供するものとなるであろう、と考えている。

ここで紙面をお借りして、少し個人的なことを述べさせていただきたい。『洋楽導入者の軌跡』⁽⁹⁾という日本音楽史研究史上の不朽の名著を残され、私の研究のよき指導者であられた中村理平氏は、日本のハリストス教会音楽史、カトリック教会音楽史の研究の後、各派プロテスタント教会音楽史の筆を起こされようとされた矢先、一九九四年十月、突然逝去された。

この稿を書き始めるとき、故中村理平氏の遺著を開きつつ、遺志を少しでも継がせていただきたいと願わずにはいられない。

二 ミッションとオルガン

クラークとオルガン

一九七一年二月頃、「ニューヨークから自宅に帰ってみると、娘が「オルガンが来た」と言うので訊いてみると、音楽室にあるという。そんな部屋はなかったはずだったが、すぐにそれは新しい調度品を記念して自分の書斎につけられた新しい名前であることが分かった」。

リード・オルガンのカタログに載った、本来なら、とりたててどうということのない推薦文が、その寄稿者が、アメリカン・ボードで日本ミッションを担当していた書記となると、平凡な推薦文が歴史的に重要なドキュメントとしての意味あいを帯びてくる。⁽¹¹⁾

わたしの家族の喜びや利益は別にして、オルガンはわれわれの宣教集会にすくなくからぬ価値をもっていることを私は確信する。マイクロネシアから最近届いた手紙は、われわれの愛する祖国のキリスト教文化の象徴として、島々を巡っているモーニングスター一号に乗船していた一団にオルガンが与えた喜びについて褒めそやしていた。⁽¹²⁾

正式名称をアメリカン・ボード・オブ・コミッションナイズ・フォ・フォーリン・ミッションズという団体は、宣教師を海外に組織的に派遣するためのアメリカ最初の団体で、一八一〇年六月二十九日に誕生した。一八一二年二月に最初の宣教師五人をインドへ派遣し、六月二十日に法人となった。これによって、アメリカン・ボードは宣教地で不動産を所有することなどが出来るようになった。

この団体を実際に運営したのは、会長、副会長各一名、十人程度の諮問委員であった。そして、書記、記録総務、

財務、監事がこの中から選ばれた。

この稿が扱う年代のほぼ中央の一八七七年の時点で言えば、ボードが宣教活動を展開していた地域は、アフリカ、トルコ、インド、セイロン、中国、日本、ミクロネシア、メキシコ、スペイン、チェコスロバキア、サンドイッチ諸島にわたり、総勢三七五人の宣教師を派遣していた。年間活動資金は、およそ五十万ドルであった。⁽¹³⁾

一八六五年、あるいは一八六六年からボードの書記を務めていたのが、N・G・クラークであり、彼がオルガン会社に推薦文を寄稿していたのであった。彼が執務をしたのは、ボストンのビーコン街十四の宣教師館であった。一階と二階が書記と財務の執務室であった。三階が図書室になっており、会議は毎週水曜日ここで行われた。

書記の第一の仕事は、担当地域から毎日のように送られてくる膨大な書簡に目を通し、必要なものは自らも出席する諮問委員会にかけ、適切な指示を現地に伝える、というものであった。派遣した数百人の宣教師とボストンの宣教師館を結ぶ手段としては、文書による通信しか当時はなかった。当然、ボードの経費の最大のものが郵便料金となつて消えていった。アメリカン・ボードの宣教活動はこの面から見れば、手紙でボストン本部と各宣教地とを結んだネットワーク活動であったと言える。

このネットワーク活動を支えていたのが、クラークであった。そのような書記であったクラークが、アメリカの一リードオルガン会社に推薦文を寄せているという事実ほど、海外宣教活動にリードオルガンがいかに必需品であったかを示しているものは他にないであろう。

ところで、日本ミッションを担当した書記クラークは、どのような経歴の人物であったのだろうか。一八二五年、バーモント州カレリーに生まれた彼は、バーモント大学を一八四五年に卒業し、二年間、ハイスクールで教鞭をとった後、アンドーバーとアーバンの神学校で学び、一八五二年にアーバン神学校を卒業した。バーモント大学で英語を教

え、一八六三年からはニューヨーク州 Shemecrady のユニオン大学の教授になった。一八六五年の年会で、引退する書記の後継者に指名され、翌年から書記のすべての業務を引き継いだ。この時から、一八九四年に引退を表明するまでの二十八年間、書記という激務をこなした。引退して間もなく、一八九六年一月三日に彼は没した。⁽¹⁴⁾

一八七一年という年は、壮年期のクラークにとって特に日本ミッシェンとの関係で最も旺盛な活動時期を向かえていた時期にあたっていた。すでに書記の仕事にも慣れ、十分積んだ経験を十二分に生かし、その卓抜な管理能力を縦横に発揮した時期だったといえよう。関西に根を下ろしたアメリカン・ボードは、その活動を急速に拡げようとしていた。音楽について言えば、クラークの一つひとつの判断と指示、とくにオルガンに関するそれが、アメリカン・ボード日本ミッシェンの音楽活動に重要な関わりを持つてくることになるのである。

さて、最初に紹介したクラークの推薦文によれば、モーニングスター号に乗船していた一団はオルガンをとても喜んでいて。一八七一年二月七日のアメリカン・ボード諮問委員会の議事録に、これに呼応する議事を見つけることができる。⁽¹⁵⁾

海外伝道書記は、スミス・アメリカン・オルガン会社が新モーニング・スター号の備品として一台の立派なオルガンを寄贈したことを伝えた。その後、諮問委員会は価値ある寄付に感謝することを決議した。

リードオルガンがキリスト教海外伝道を重要な市場としていたことは、リードオルガンの内、ポータブルのものを別名ミッシェンナリーオルガンと称していたことから知れる。エステヤメーション・アンド・ハムリンといった有名なオルガン製造会社の他にも、当時、アメリカには、それこそ数え上げるのに苦労するほどのオルガン製造会社があった。⁽¹⁶⁾ そのオルガンの重要な消費先の一つがミッシェンであった。簡単に持ち運べるポータブルオルガンは宣教にはなくてはならない備品であったのである。そしてこの備品が、文部省の唱歌の授業に欠かせない楽器となっていくこと

からも分かるとおおり、日本音楽の近代化に深く関わってゆくのである。⁽¹⁷⁾

日本ミッションとオルガン

日本ミッションでオルガンの話題が初めて出てくるのは一八七二年十一月二十日付けで日本ミッションの書記をしていたO・H・ギューリックに宛てたクラークの書簡である。⁽¹⁸⁾

メーソン・アンド・ハムリンのいいオルガンを一台取ってある。日本に送ろうか。すぐにでも役にたつのではないか。

アメリカン・ボード日本ミッションが最初に手にしたオルガンが、この手紙に出てくるオルガンであった。

ギューリックの来日と活動の背景について触れると、彼はアメリカン・ボードが派遣した二番目の宣教師であった。サンドイッチ諸島の宣教師の子として、一八三〇年にホノルルで生まれている。一八七一年二月一日、妻とともにサンフランシスコを発ち、三月三日に神戸に着いた。

宣教師が常駐して活動する場所のことをミッションではステーションと呼んでいた。アメリカン・ボードの日本宣教の進展については、宣教師の到着とステーションの開設が目安になる。クラークがオルガンが要らないかと日本ミッションに問い合わせたこの当時、日本ミッションは神戸居留地と大阪の川口居留地にステーションを置いていた。

当時、神戸には、D・C・グリーン、J・D・デイヴィス、J・C・ベリーの三人の宣教師が常駐していた。この神戸ステーションが、アメリカン・ボードにとって最初のステーションで、一八七〇年四月にグリーンによって開設された。グリーンは、一八六九年、十一月三十日に横浜に到着したアメリカン・ボード最初の宣教師であった。他派の宣教活動との競争を避ける目的で、彼は、翌一八七〇年四月神戸に移ったのである。これによってアメリカン・ボ

ードの活動の拠点は関西に置かれることとなった。一八七一年十二月一日にデイヴィスが、一八七二年五月二十七日にはペリーが到着し、活動がようやく活発になってきた。デイヴィスは後に、京都に移り、同志社英学校、同志社女学校の創設に関わることになる。ペリーは宣教医であったが、神戸ステーションで初期に使われた讚美歌の編集をすることになる。

大阪ステーションが設置された日付けとして、どの日付けを採用すべきかは、微妙な問題であるが、一八七二年七月十七日付けのクラーク宛の書簡が、大阪に最初に駐在したギューリックが大阪から出した最初の手紙である。

これより先、五月十六日のデイヴィス書簡から、京都に足場を確保しようとするギューリックの試みがあったことが分かる。この試みは失敗し、ギューリックは大阪川口居留地に隣接する川口与力町に落ち着くことに決めたのであった。

ギューリックが開設した大阪ステーションに、九月二十四日に横浜に到着したM・L・ゴードンが加わった。彼は後に同志社英学校で讚美歌を教えた。これによって彼は、ミッシェンの音楽だけでなく、文部省の唱歌にも重要な影響を与えることになった経緯については、後で詳しく触れるつもりである。

一八七七年に大阪に着いたカンバーランド長老派の宣教師J・B・ヘールは、ゴードンについて次のような印象を伝えている。

あの時大阪で過ごした最初の晩はわすれられないものである。既に五年以上伝道にたずさわっていたゴードン博士は、われわれの眼から見ると老練な宣教師であった。彼は全身全霊を伝道の仕事に傾けていた。彼は眼を患っており、光りが一番彼の眼のためには悪かった。家にいるときは、暗くした部屋に座り、明るいところへでるときには眼をおおっていた。だから目隠しをして生徒や会衆の前に立たねばならなかったが、教授と説教の仕事は続けていた。彼の家での第一夜は、故国からのニュースを伝えることだけで終わった。就寝の時間がくると、博士は目隠しをしたままオルガンに向かい、シオー・トウ・ヴィ・ナッシング・

ナッシンググを弾いた。このような状況の中で聞いたこの讚美歌は、それ以来、私をゆきぶりかり立てるものとなった。⁽¹⁹⁾

三 他教派から見たコングリゲーションの音楽教育の位置づけ

アメリカン・ボード日本ミッションの音楽活動が活発になる年を選び出すとすれば、一九七三年になるであろう。宣教活動もそうであったように、アメリカン・ボードの音楽活動も関東の他ミッションの活動より少し遅れて開始された。ここで、アメリカン・ボードの音楽活動の歴史上の位置を確認するため、先行した横浜と東京の他教派の讚美歌教育について簡単に触れてみる。

へボン夫人とキダー

讚美歌教育がいつどこで最初に行われたかは、興味をそそる問題であるが、そういう問題がいつもそうであるように、やや漠然としたことしか言えない。確認できる最も古い記録は横浜のへボン施療所で開かれていた熱に関係している。

わたしのクラスの少女達は進歩しています。まもなくキリスト教の女性として成長することでしょう。マタイ伝第五章の一部を英語と日本語で勉強しました。それに主の祈りとたくさんの讚美歌も学びました。しっかり教育させえれば、彼女たちは上手に歌えるようになるに違いありません。⁽²⁰⁾

一八六九年六月二十九日のへボン夫人の手紙に見えるこの文章は、日本人が讚美歌をうたえるのかどうか、宣教師たちが不安に思い、あるいは疑っていた時代の雰囲気をも伝えている。

ヘボン夫人はまた日曜学校も開いていた。日本の初期讚美歌集を蒐集したことで有名なオルチン宣教師の伝えるところによれば、ヘボン夫人の日曜学校は、谷戸橋のすぐ傍にあったヘボン治療所で行われ、英語の歌を外国人や日本人の子供に教えていたらしい。日本人のクラスは部屋も時間も外国人のものとは別になっていた。⁽²¹⁾この年の十二月三日、この日曜学校に、アメリカン・ボードから派遣されて来日したばかりのグリーン宣教師の夫人が出席した。夫人はそこで日本の少女らが讚美歌を歌う光景を眼にして驚いたにちがいない。彼女はさっそく当時アメリカで流行り始めていた“Jesus loves me”⁽²²⁾を子供たちに教えた。ヘボン夫人の指導で讚美歌を歌えるようになったばかりの少女たちは、グリーン夫人が歌ったアメリカの最新の讚美歌に夢中になって聞き入ったに違いない。このアメリカの日曜学校の讚美歌はやがて日本で最も愛唱される讚美歌「主われを愛す」となるのである。グリーン夫人は最初の訪問の後もしばしばこの日曜学校に通い、他にもいろいろな讚美歌を歌ったと、オルチンは伝えている。⁽²³⁾

ヘボン夫人の塾と日曜学校とを引き継いだのは、オランダ改革派が最初に派遣した女性宣教師M・E・キダーであった。一八七〇年七月六日、キダーはブラウン夫妻と一緒に、最初の赴任地だった新潟から横浜に移ってきた。ヘボン夫人から引き渡された日本の子供を教えはじめた事情について、彼女は、九月二十二日の手紙で、「わたしの生徒は四人だけです。授業を開始してから、まだ二日しかたっていない⁽²⁴⁾」と述べている。

以前ヘボン夫人が教えていらした、ヘボン博士の診療所で開かれるわたしのクラスに、二十分歩いていきます。博士が扶くわたしにその場所を提供して下さったのです。わたしは始めたばかりです。⁽²⁵⁾

このクラスは男女混合だったが、キダーは最初から女子教育しか眼中になかったらしい。

今は、少年、少女両方教えていますが、女の子が十分集まったら、男子はやめ、女子だけを教えるつもりです。⁽²⁶⁾

十月になって少し生徒が増え、女生徒三人、男生徒四人の計七人になった。

わたしは彼らにまだ歌唱指導はしてません。女生徒だけになったら、音楽も教えたいと思っています。⁽²⁷⁾

と言っていることからすると、ヘボン夫人が始めた歌唱教育は一時中断していたらしい。キダーが讚美歌教育についてはじめて報告したのは、一八七一年十月二十一日のことであった。しかし、それについて述べる前に横浜のもう一つの讚美歌教育の拠点に触れなければならない。

アメリカン・ミッション・ホーム

横浜山手居留地に「アメリカン・ミッション・ホーム」が設立されたのは、一八七一年八月二十八日であった。このミッションホームは、讚美歌が教えられ歌われることで、洋楽普及の最初期の拠点ともなった。

ヘボン施療所の前の掘割の向こうは丘陵になっていた。横浜では、港のそばの旧居留地が手狭になり、現在、フェリス女学院、横浜共立学園が立っている陵にも居留地が拡げられ、山手居留地と呼ばれていた。八月二十八日、この山手居留地の四十八番にインド、中国に続く、三番目の「アメリカン・ミッション・ホーム」が設立された。混血児の孤児院として出発したホームを当時訪れたものの目を驚かせたのは、女兒がブランコに興ずるというめずらしい光景であったろう。ホームは、今で言えば、育児園、保育園、幼稚園を合わせたようなものであったらしい。

ホームを建設したのは、M・P・ブライン、L・H・ピアソン、J・N・クロスビーの三人の女性宣教師で、彼女らを日本に派遣したのは、婦人一致海外伝道局という組織であった。これは、一八六一年一月、男性の側からの長い間の反対を乗り越えて、アメリカで、最初に独身女性宣教師を海外に派遣するために設立された団体であった。活動方針は、まず、伝道地に建物を購入し、女学校、孤児院、女性と子供のための病院などを経営することであった。こ

これらの事業のための施設は、「ミッション・ホーム」と呼ばれた。⁽²⁸⁾

サンフランシスコから日本へ向かう船中で、彼女らは、貨幣制度を研究しての帰国中であった伊藤博文らと乗り合わせた。三人は、船室で讚美歌を歌うことがあったらしい。それを聞いた彼らの一人が、

「歌の学校を開いていただけないだろうか」

という希望の述べた、とプラインは書簡で語っている。⁽²⁹⁾ 日本の役人の思いがけない一言は、プラインらの重要な仕事の一つになった。六月二十五日、彼女たちは横浜に上陸した。ヘボン施療所、ゲート座、宣教師バラ宅に続く、四番目の礼拝所ともなったホームは、また、船上で日本の一役人が言った、「歌の学校」にもなってゆく。

ヘボン夫人といい、キダーといい、そしてプラインも、日本で讚美歌教育の端緒を開いたのはすべて女性宣教師であった。そこで、独身女性宣教師を派遣した団体について簡単に触れておかなければならない。

アメリカのプロテスタントは実に多くのセクトに別れているが、それらのセクトが続々と女性宣教師を海外に派遣するための組織を作り出した年代は、明治維新の年代と重なっていた。⁽³⁰⁾ このことは日本の近代化、とりわけ女子教育に対して決定的な影響を及すのである。セクトごとの女性宣教師派遣団体の設立年を順に挙げてみると、神戸女学院を設立した会衆派は一八六八年、福岡女学院のメソジストは一八六九年、女子学院のプレスビテリアンは一八七〇年、捜真女学校のバプティストは一八七一年、立教女学院の聖公会は一八七三年、フェリス女学院の改革派が一八七四年、さらに少し遅れて広島女学院の南メソジストが一八七八年という具合に並ぶ。

日本に派遣されて来た独身女性宣教師らは、大半が高等教育、日本でいうなら女子師範学校を卒業した程度の教養を身につけていたから、この時期、アメリカは期せずして大量の優秀な女性教員を、長い期間、継続して日本に送り込んだことになった。⁽³¹⁾

男性宣教師の主な活動分野が当然、信者の獲得であったのに対して、女性には、最初から、教育を通じて影響を与えるという補助的役割が期待されていた。彼女ら自身も、教育に高い理想と情熱を持って奮戦した。讚美歌とオルガン、つまり日本の洋楽は彼女らの奮闘の思わぬ産物であった。日本中に讚美歌が浸透したという文化史上の珍事は、日本の明治維新がたまたまアメリカの女性宣教師派遣団体の興隆期と重なった、という偶然に負うところが大きいのではないだろうか。

さて、他の宣教師と同様に、キダーは梅雨と夏の気候にまいていた。九月になってようやく氣力を回復したキダーは、第二週からヘボン邸での授業を再開した。その頃には背後の丘陵にはミッション・ホームができていた。

この時彼女は希望通り、女子だけの教育に専念し、はじめて讚美歌を教えた。女の子のうち、何人かはヘボン夫人から手ほどきを受けて、讚美歌の経験があつたにちがいない。そのせいもあつて、キダーの讚美歌教育はすぐに予想以上の成果をあげた。

女生徒は熱心に学校にもどってきて、素晴らしい進歩をみせています。現在わたしには十二人の生徒がおり、その中の七人は十四歳から十七歳で、残りの五人は八歳から十歳です。⁽²²⁾

この女生徒たちにギダーははじめて讚美歌を教えたのである。

「わたしは彼女たちにくつつかの讚美歌を教え、彼女たちは『主われを愛す』を見事に歌い、「牧主わが主よ」、「ささやかなる、しずくすら」⁽²³⁾「Happy land」なども歌えます。まだほんの子供の一番年少の少女は、非常に澄んだ良い声で上手に歌い、他の者達よりもさわだつてはつきり聞こえます」

この子供らの歌声が宣教に持つ意味をキダーは誇らしげにこう報告している。

彼女たちの愛らしい小さな声が、こうした貴い讚美歌を非常に見事に歌うのをお聞きになり、彼女たちの心が感応する日も間近

であると感じられれば、きつとあなたの心も和まれることでしょう。⁽³⁴⁾

同じ時期、同じような光景が、「アメリカン・ミッシヨン・ホーム」でも見られた。ホームの三人の女性宣教師のうち音楽を最も得意としていたのはピアソン宣教師だったようである。彼女は、開校間もないころホームに生徒が集まらず、学校の門前に立ちながら、「アナタいらっしやい、アナタいらっしやい」と招いたと伝えられている宣教師である。彼女は全身これ伝道精神の塊といった人物で、来日してからの三十数年間一度も帰国しなかったという。後に宣教師オルチンはピアソンについてこう語っている。

一八七一年（明治四年）に、ミセス・ピアソンとミス・クロスビーが、山手四八番に学校を開設した。午前中は青年男子のために英語のクラスが開かれ、午後は婦女子のためのクラスであった。この両方のクラスで、ミセス・ピアソンは英語讃美歌を教えたのである。ミセス・ピアソンは、四年間讃美歌を教えつづけ、この初期の時代の、おそらくどの宣教師よりも、多くのことをなしとげたと考えられる。彼女はどクリスチャンが讃美歌を歌うということに関して、その知識を与え、鑑賞力を高めた人はいないのである。⁽³⁵⁾

彼女は教会の日曜日の礼拝にオルガニストを務めるほど、音楽に堪能だった。

ホームに引き取られた子供たちには、開設とほとんど同時に、おそらくピアソンを中心にして讃美歌が教えられた。開設からおよそ三カ月たった十二月頃には日曜日の夕方集まってきた日本人によって、最初の礼拝がはじまった。彼らは最初はただ歌を習うために集まってきたという。聖書の講義や祈りがはじまる前の数十分間、かならず Songs of Zion という讃美歌集の讃美歌が歌われた。

この礼拝に、弾正台から諜者が忍び込んだ。諜者とは密偵であり、思想犯を取り締まる秘密警察のようなものと考えてよいであろう。横浜の開化の状況には諜者は驚くことはなかったが、洋教、つまりキリスト教の盛んなることは「言語に絶し」と、驚きを隠さなかった。

「小生はビヤールに入門し」、「ビヤール学校」、つまりミッション・ホームは、「午前は男子四十二、三人、午後は婦女子老幼とも二十人ばかり、およそ六十人あまりの弟子なり」という盛況振りであった。ある時は「尼寺」と嘲笑されもしたホームには、当時、中村正直の娘の他、福沢諭吉の娘三人と姪の福沢おきよ、井上馨の娘二人などが入学しており、日本ではミッションスクールが特に女子教育の名門となる端緒をすでに見せていた。彼女らは、聖書を読み、「歌を唱え、神を祈る」こと盛んなり、と諺者は嘆息した。⁽³⁷⁾

一方、ホームに住んでいる五人の子供たちが、はじめて三ヶ月もたたないのに、“There is a happy land”と“Jesus loves me”の二曲の讚美歌が歌えるようになった。日本人は歌を歌わないと信じていた宣教師たちには、小さな子供が歌を好んで歌うようになる様子はちょっと信じられない光景だったにちがいない。

ホームにノナと呼ばれる女の子がいた。彼女は、宣教師が歌う讚美歌をはじめ聞いて驚いたが、すぐに好きになった。宣教師にとって彼女は最初お行儀の悪い子で従順ではなかったが、すぐに気に入られる子供に変わった。彼女は毎朝一番に起き、階段を降りてきて、小さな椅子に座り、“Jesus loves me”“Christ is born the Lord of glory”“There is a happy land”を次々に歌うのであった。⁽³⁸⁾

この年の暮れ、ヘボンが『和英語林集成』を印刷するため上海に出かけたあと、ヘボン夫人が主催していた日曜学校もキダーに任された。当時日曜学校の生徒であった高木こうはこう回想している。

ニューグランドの裏のあたりに西洋人の『芝居小屋』がありました。午前中は礼拝があってバラさんが説教をしていました。午後キダーさんがこの芝居小屋で日曜学校をしていました。(中略)午前中バラさんの説教を聞き、午後キダーさんの日曜学校へ出席するので毎日曜日弁当持ちで、太田町から芝居小屋まで通ったのです。⁽³⁹⁾

この西洋人の『芝居小屋』とは、居留地六八番本町通にあったゲーテ座のことで、バラが組織したユニオン教会が

ここで活動していた。つまりキダーはユニオン教会の日曜学校長であった。校長は翌一八七二年一月二十二日の書簡で、次のように述べている。

当地の日曜学校は、ヘボン夫人が上海に行かれたので、全く私に任ざれています。ブラウン夫人は日曜学校で私を手助けして下さいます。またブライン夫人と共にやって来たピアソン夫人が私の学校の図書館員として働いてくれます。私の生徒の約半数が外国の子供達と一緒に日曜学校にやってきます。クリスマスに私達は、私の日本人の生徒全員と、日曜学校の子供達に贈物と共に大変美しいツリーを与えました。日本人も外国の子供達も一緒に喜びました。これに応えて日本と外国の子供達は彼らの知っている讚美歌の一つを歌い、居合わせた者すべてを非常に喜ばせました。なにか下品なことを取り入れなくても子供達を楽しませることが出来ることを彼等に分かってもらえて、私はとても嬉しい気持ちでした。⁽⁴⁰⁾

五月二十三日には、「私の日曜学校も大きくなっています。外国人の子供達は五十人で、土地の生徒も非常に増えました。日本の子供達には、歌うことが最大の魅力のようです」と報告している。⁽⁴¹⁾

説教者バラは、歌うことが大好きな日本の少女について、六月二十四日の書簡でこう印象を書き残している。キダーの日曜学校には、「六〇名以上も生徒がいて、その中に、ミス・キダーの学校の生徒が一二以上も加わっています。外国人の子供たちと、日本の女生徒が、毎週、「主の日」に、日曜学校が始まる前、半時間、日曜学校讚美歌をいっしょにうたっているのを聞くのは、楽しいものです」⁽⁴²⁾

これより少し前、四月のはじめ頃、中村正直は、「一族の娘ども三人をビヤルソンに預けに来、起臥、共同人館内にて致し居るなり」⁽⁴³⁾と伝えている。ホームでは、日曜日と水曜日の夜に礼拝が行われるようになり、四月七日の夜の礼拝について、「書生の帽子、洋傘など、種々品物紛失するほどの繁盛なり」と、その盛況ぶりが伝えられている。⁽⁴⁴⁾ピアソンの指導で英語讚美歌の練習が行われたのは、礼拝に先立つ数十分の間であった。

音楽史の面から言えば、この、日本で最初の組織だった西洋音楽教育から、熊野雄七、奥野昌綱、植村正久といっ

た、後年の日本語讚美歌の発展を支えた人材を輩出したことが重要であった。

宝蔵院流の槍の使い手で、幕臣として上野の戦いにも参加した奥野は、すでに高齢に達していた。雅楽の笙をたしなんでいたというが、まったく種類のちがう讚美歌の曲に、歌うに足る日本語訳が付けられるようになったのは、奥野の貢献が大きい。讚美歌の初期の日本語は、宣教師が翻訳したもので、日本人から見ると「噴飯に堪えない」⁽⁴⁵⁾ものであった。山本秀煌などは「多くは採用されなかったので、救われた」⁽⁴⁶⁾とまで言っている。讚美歌の日本語訳を手がけた一人、バラの日本語は、「下僕の日本語を使っていたので、一生涯ご損でした。お話するにも、てにをはが抜けたり、説教に変な日本語がはいったり、実に気の毒でした」ということであった。

讚美歌の曲に日本語訳を付けるという作業は、音楽の面からも、今日からは想像もできないほど困難な仕事であった。その最も大きな障害は、西洋の曲のリズムと日本の詩のリズムがまったく異なる原理に基づいていたからである。簡単に言えば、七五調といった日本語のリズムを、三拍子とか六拍子にうまく当てはめ、かつ日本語としておかしくないものになければならなかったのである。

奥野老人が讚美歌を真面目に、熱心に歌い出すと、ホームの年頃の女の子たちは、クスクス笑いだした。「義太夫節や、新内節が讚美歌にこんがらがって、其の調子の狂るたることのしばばあった」⁽⁴⁷⁾からであった。

この年七月、キダーは県令大江卓の力によって野毛山の「政府役人の官舎近くの、こじんまりとした素敵な日本家屋」⁽⁴⁸⁾を教室に借りることができた。

一八七三年の報告書に、讚美歌歌唱に特に力をいれたとある。この頃すでにキダーの学校にはシラキューズから送られたオルガンがあったが、問題はキダーがオルガンが弾けなかったことであった。女生徒の歌唱力がどんどん向上するので、ぜひオルガンを弾ける人材を送って欲しいとキダーは伝道局に要請した。

あなたが手紙を同封してください。ミズ・グレイス・ヴァン・インゲンの姉のブルックリンのミス・ルイーズ・ヴァン・インゲンに私の心は向いています。唯一つ、彼女が足踏みオルガンを弾けたかどうか覚えていません。ご存じのように、私達の許にシラキューズからとても立派なオルガンを送っていただきましたが、私が弾けないので、誰か弾ける人を欲しいと思っています。彼女は非常に上手に歌いますので、そうした励みになるものを当然得て然るべきなのです。⁽⁴⁹⁾

一八七三年十一月一日にこう書いてからも、キダーはたびたび、次期派遣宣教師の必須条件としてオルガンが弾けることをたびたびくり返している。キダーにしても讚美歌のメロディーをなぞるくらいは出来たであろうが、それは追いつかないくらい生徒の歌唱力が上がっていたことを手紙は如実に語っている。

カロザース夫人ジュリアの活動

東京での讚美歌教育の開始については、カロザース夫妻の来日と長老派の築地進出から述べるのがいいであろう。一八六九年九月二十八日の会議で、米国長老派教会では旧来の神奈川（横浜）の伝道拠点に加え、維新後に開かれた築地居留地に進出することを決定し、七月二十七日に横浜に着いたC・カロザース夫妻がその任にあたることになった。秋にカロザース夫妻が真新しい築地ホテルに逗留するようになる。十一月には南小田原町一丁目の雑居地区の借家に移った。

この年十月二十二日、十二月二十四日付けカロザース書簡によれば「夫妻は、午前中は日本語を学び、午後は三時間ほど日本人に英語を教えた」⁽⁵⁰⁾。

翌一八七〇年二月一七日カロザース書簡によれば「一八七〇年二月半ばまでには、生徒は約一二名に増え、特にジュリアは、日本語の修得を良くし、教えることに強い興味を持つようになった」⁽⁵¹⁾。こうしたジュリアがやがて日本の

少女等に讚美歌を教えることになる。後に文部省の唱歌に貢献した伊沢修二は、この時分カロザースに英語を習った生徒の一人であった。⁽⁵²⁾

一八七一年八月、蒸気船の爆発事故でコーンズ夫妻が死んだため、ジュリアはその遺児をアメリカの遺族に引き渡すべく帰米した。

アメリカン・ボードの場合と違って長老派の女性宣教師の多くの手紙は、散逸してしまったのか、今日目にすることができない。幸いなことに、ジュリアに関しては、彼女が日本での宣教活動をまとめた著書⁽⁵³⁾があるので、主にそれによって一九七三年までのジュリアの音楽教育をたどってみることにする。

一八七二年三月五日、ジュリアは日本に戻ると、三月末からハマという女性、続いてミシとキヨという女の子を教え始めた。

四月三日、和田倉門内会津屋敷から出火し、築地居留地六番の宣教師館も全焼した。ジュリアは「東京の最も賑やかな通りの角にある」新山田屋という下宿屋の三階に仮住まいすることになった。

四月二〇日のカロザース書簡に初めて妻の学校が主に女性を対象としていることが述べられている。この時ジュリアは少年と少女のクラスを一つずつ持っていた。

下宿の二階に三味線のお師匠さんが住んでいて、ジュリアは日本のお稽古を目撃してこう述べている。

彼女は小さな少女を床の上に座らせて三味線のレッスンをしている。音楽はとても単調でたったの一声部しかありません。学習はすべて模倣によっています。⁽⁵⁴⁾

ジュリアのところには、焼失を免れたのであろう、キャビネット・オルガンがあり、三味線のお師匠さんはこのめずらしいものについて質問を浴びせかけた。

それはたいへんな好奇心の対象で、それそのものがまさに宣教師です。私が一音でも弾くものなら、下宿中の人たちが集まってくる。私はときどき、ペダルを踏むのを止めます。そうすると彼らは狐につままれて、音がどこから来るのか知ろうとして身を屈めるのでした。⁽⁵⁵⁾

音楽教育に関するジュリアの最初の記述はこのオルガンに関係して出てくる。

「私たちの生徒は火事のあとすぐに私たちを見つければ、授業を続けることになった。新山田屋の三階で授業が終わると、小さな少女たちはオルガンの周りに集まり、英語の讃美歌を数曲練習した。彼女たちはあつと言う間に “In the Light” を覚え、“Light” “God” “walk” の日本語の意味を学んだ。大きな強い声で一斉に歌う彼女たちの歌声は、新山田に楽しく響きわたった⁽⁵⁶⁾」という。ジュリアは宣教師らしい次の感想でこの時の様子を締めくくっている。

ああ、この小さな足が王国への道を見つけることができ、きつとすぐに「光りの中へ歩む」に違いない。⁽⁵⁷⁾

カロザースが焼け跡にまず建てたのは、後で「台所兼下男部屋棟」となる二階建ての建物で、夫妻は六月にはその建物の二階に移り住んだ。一階はダイニングルーム兼バーラー兼教室であった。

「この時までにジュリアの生徒は増え続けたため、彼女は一日四時間教え、休むのは月に一、二日という熱心さで仕事をした。あまり一生懸命なので心配だ、とカロザースがもらすほどであった（一八七二年四月二〇日、二二日、五月二〇日、六月一九日付けカロザース書簡⁽⁵⁸⁾）。讃美歌についてジュリアはこう述べている。

子供たちは “Little drops of Water” “There is a happy land” “Jesus loves me” その他のたくさんのお讃美歌を学びました。⁽⁵⁹⁾

カロザース宣教師夫妻は慶応の音楽教育についてもエピソードを残した。七月六日、カロザースは慶応義塾に雇われて教師となった。須田辰次郎の「義塾懐旧談」（三田評論、大正六年二月、第二三五号、五一頁）によれば「細君

は、ドレミハソラシドの発音より、ゼサスラーブスミー等の唱歌を教へなどして、種々其宗旨に引入るゝの策を講じた⁽⁶⁰⁾。

有名な婦人運動家、山川菊栄の母千世は、この年の十月三十日に築地万年橋にあった上田女学校に入った。これは一八七二年の有名な女子留学生の一人、上田貞の父が開いた学校であった。千世は最初の日の感想を次のように回想した。

椅子にこしかけるのははじめてでしたが、入学第一日、おそろしく日本語のうまいカローザル夫人というアメリカの先生から地球儀を見せられて日本の位置や、地球の自転の話とききは、はじめて目のあいためくらのよう、一生忘れぬ感激にうたれました⁽⁶¹⁾。

十一月に礼拝堂兼用の教室が完成した。教壇には黒板とオルガンが置かれ、子供たちは毎日歌った。

日本語の小さな讚美歌集がジュリアの子供たちに届いたのは、一八七三年の夏であった。「彼女たちは自分の小さな讚美歌集を持っていて、とても楽しんでます⁽⁶²⁾」と彼女は言っている。

日本の音楽はわれわれのものとはとても異なっています。しかし、少女たちは西洋風に歌うことをとても楽しんでます。彼女らのほとんどはもう音符を読めるようになりましたし、ときにはとてもいい声で歌います⁽⁶³⁾。

そんな少女たちがこの年のクリスマスに、たくさんの讚美歌を歌ったことをジュリアは書き残している。ジュリアの回想録によれば、それらの讚美歌は、“There is no name” “Autumn” “We three kings of Orient are” “Who is He in yonder stall” “When he comth” “I am Jesus’ little lamb” “The Pilgrim’s song”⁽⁶⁴⁾であった。彼女たちの歌唱は、その態度とともに出席した外国人に賞賛されたという。

こういって経験を踏まえたジュリアの次の言葉は、オルガンの讚美歌教育への貢献を証言したのとして貴重であ

る。

協会から送られたキャビネット・オルガンは私たちの仕事にはとても貴重な手助けとなります。それがなければ、どうやってい
いのか分かりませ⁽⁶⁵⁾ん。

四 ステーションと讚美歌教育

一八六九年の六月頃に横浜居留地のヘボン施療所という小さな一点ではじまった讚美歌教育は、すぐに、横浜居留地全体に、そして東京築地居留地に広がっていった。この二つの居留地の讚美歌教育と同じような光景は、すぐに他の居留地、大阪川口、神戸、長崎、函館でも見られるようになる。日本列島の北から南まで広がっていた居留地から、やがて日本全体に讚美歌教育が浸透してゆくことになる。その様子をアメリカン・ボード日本ミッションが神戸と大阪の居留地に開設した神戸ステーション、大阪ステーションの順に、まず一八七三年から一八七五年まで見てゆくことにする。⁽⁶⁶⁾

神戸ステーション

一八七二年十一月にクラークが「オルガンが要らないか」と日本ミッションに尋ねてきたことはすでに述べた。翌一八七三年一月十六日付けの手紙でギュエリックは返事を書いた。

立派なメーソン・アンド・ハムリンのオルガンのことですが、願ってもないことですし、すぐにとても役に立つ、というのが一致した意見です。大阪にも必要だというのが大阪の一致した意見ですし、すぐにでも使う、というのが神戸の兄弟たちの一

致した意見です。もし、よろしければ、二台送って下さい。一つは大阪のもので、一つは神戸のもので。

日本人はわれわれ風の音楽がとても好きで、いとも簡単に歌唱を学びます。バラ氏は日曜学校の讚美歌を日本語に翻訳しはじめるのに成功しました。朝、日本人と聖書を朗読するとき、これらを使っています。⁽⁶⁷⁾

バラが翻訳した讚美歌を使っているというギュリーリックの言葉は、後にオルチンが伝えたギュリーリックの次の言葉に符合している。

一八七二年九月、横浜での宣教師会議に出席したとき、われわれは、この会合で英語の讚美歌しか用いられていないことに気がついた。私はバラ氏に、なぜ讚美歌を日本語に翻訳しないのかと尋ねた。われわれが横浜から大阪に、ちょうど帰ろうとしていた時に、バラ氏は二篇の讚美歌(“Jesus loves me”と“there is a Happy Land”)をわれわれのところに持ってきた。私が深く感銘を受けたのは、二篇の讚美歌のうち一篇、それとも一篇のうちの一部分は私が訳した、とバラ氏が言っていたことだった。おそらく『エスわれを愛す』だったであろう。その折り返しの部分が『はい、エス愛す』だったことは確実である。バラ氏が渡してくれた翻訳は、歌うに足る韻と音数律を持っていたに違いない。なぜならば、すぐにそれを使って歌うことができたからである。⁽⁶⁸⁾

ギュリーリックがバラ訳の讚美歌“Jesus loves me”と“there is a Happy Land”を使っていた学校は、川口居留地の隣の、梅本町十番地にあったゴードンの家屋の一室であった。⁽⁶⁹⁾ギュリーリックはこの学校にオルガンが必要だと感じていたのである。学校ではやがて日曜礼拝がはじまり、これがさらに大阪の最初の教会へと発展してゆくことになる。⁽⁷⁰⁾

二月二十五日にギュリーリックの返事を受け取ったクラークは、二十八日に、メーソン・アンド・ハムリン社のオルガンを日本に発送するように指示したから、協調して設置場所を決めるように、と返事を書き送った。⁽⁷¹⁾二台送ることができないので、神戸に置くか、大阪に置くか、日本ミッションに決定を委ねたのである。

教会設立の気運と礼拝での音楽の必要性が出てきた。ポストンのクラーク書記と神戸のギューリックとの間でオルガン導入の話しを取り交わされてから少し後の三月頃、グリーンは、半分を書店に半分を礼拝所に使うために神戸元町五丁目月二五ドルの家賃で家を借りた。

三月五日の手紙でグリーンは、「私たちが書庫として借りた建物には、一時的にチャペルに転用できそうな、通りから簡単に出入りできる部屋があります」と述べ、この建物全体を借りれば、「約一五〇からそれ以上の座席をもった非常に良いチャペルができると考えています」と言っている。⁽⁷²⁾ このチャペルにクラークから送られてきた最初のオルガンが設置されることになるのである。

神戸からポストンのクラーク宛の六月十六日の年次報告で、ギューリックは、神戸で日本語礼拝が持たれており、平均十二人の出席者がある、と報告し、讚美歌に関して、おそかれはやかれ日本語讚美歌集を手にするようになるであろうという期待を次のように報告した。⁽⁷³⁾

各布教団で、それぞれ上手に讚美歌の翻訳編纂を試みっていますが、これはやがて、キリスト教の栄えた地方において聖歌に貯えられ、洗練されたキリスト教的感情を、日本語の讚美歌として珠玉の集成の出来る日の来ることを、期待せずにはおられませぬ。⁽⁷⁴⁾ (茂義樹訳)

一八七三年度の神戸ステーション報告書は、「九月に歌唱が礼拝に導入された⁽⁷⁴⁾」と記録した。
元町五丁目の借家は、畳敷きで五十名ほど収容できる広さの礼拝所となった。

「表は一の洋書店である。家の横合を通つて内に入ると奥は広やかな一堂で、三方に椅子が十脚列べてあつて中央には講壇がある⁽⁷⁵⁾」と描写されているこの礼拝所にはじめて歌が導入されたのが九月だったのである。

十月三日のグリーンの手紙からは、「私たちに開放されている地区は、町一番の主要部分を含み、ミッション・チ

ヤペルはもつともにぎわった地区にあります。この前の日曜日には五十名の会衆が、礼拝の始めから終わりまで参加し、空席がないために多くの者が帰りました。この数字のほとんど半分は、店主や機械工」です、とミッション・チャペルに神戸の人々が群がっている様子が分かる。⁽⁷⁶⁾

十七日の手紙では、「日曜の会衆は室内に八十名を数え、ドアの周りには人垣ができています」とある。⁽⁷⁷⁾

グリーンがこのように書いてから少し経った、十月三十一日に来日したG・M・デクスターは、最初に出席した礼拝の印象を次のように述べた。

私の日本での第一印象は非常に素晴らしいものでした。私は十一月二日の日本人礼拝に参加しました。グリーン氏が「日本語で」説教しました。礼拝の始まりには三五名が参加していました。そして、グリーン夫人がオルガンでよく知られた讚美歌を弾き始め、他の婦人がそれに合わせて歌っているうちに、ほぼ満席になりました。八〇名から一〇〇名の参加でした。彼らは入口で履物を脱ぎ、礼拝の間中正座して坐っていました。⁽⁷⁸⁾

この時グリーン夫人が弾いていたオルガンが、二月にクラークが日本に送るよう指令したメーソン・アンド・ハムリンのオルガンであった。十一月三日に神戸で行われた特別会議で、オルガンは神戸に設置する、と正式に決定された。会議録の筆者であったギューリックは十二日に私信でオルガンの礼状を認めた。

メーソン・アンド・ハムリンの素晴らしいオルガンを受け取りました。神戸の日曜礼拝に集まってくる人々はとりこになっていきます。⁽⁷⁹⁾

グリーンが毎回の書簡で伝えている日曜礼拝の盛会は、一つにはオルガンの魅力に原因があったことが分かる。このオルガンから受けた強い印象のある青年は次のように語っている。

午後の三時の時計が鳴ると鬨啼たる風琴「オルガン」がなりだした。此日は大阪のアダマス夫人が来て居って、美しい声で

「けふ主が招く来れよ、夜路たどるさ迷ふ人」といふ歌を独吟した。其から祈禱があつて説教があつた。誰れの説教であつたか忘れたが、讚美歌だけは覚えてをる。僕は風琴の音も讚美歌も此時が始めて、恰も塵外仙境に入った心地がした。宗教は理屈にあらすして、高く清き靈味に浴し、知らず知らずの間に罪惡の汚穢より脱俗するものとは、是等の消息を言つたものであらう。⁽⁸⁰⁾

このようにオルガンに魅了された青年は名前を村上俊吉と言ひ、この後一八七五年にデイヴィスから洗礼を受け、ギョーリック宅で日本ミッシヨンの週刊新聞「七一雑報」を發行することになる人物である。

翌一八七四年四月十九日、アメリカン・ボード最初の教会が、「メーソン・アンド・ハムリンの素晴らしいオルガン」が美しく鳴り響いたこの礼拝所で誕生した。グリーンは、四月二十四日の手紙で、

十九日の日曜日に十一人の会員によつて、われわれのミッシヨンと關係する第一公会が、当地神戸に組織されました。⁽⁸¹⁾
と述べた。

当時は、教会と呼ばず公会と言つていたので、名称は、摂津第一基督公会とし、これが後に神戸教会となる。元町五丁目の礼拝所で、四月十九日、十一人の日本人が洗礼を受けて、教会を組織したのであつた。洗礼式には、少なくとも百五十名の聴衆がいて、すべての席が早くから占められ、ちやうと礼拝がはじまる前に、室は一杯になつたと、グリーンは報告した。⁽⁸²⁾

最初の讚美歌集

神戸女学院オルチン文庫にある最も古いもの一つと考えられている無題の讚美歌集は、この公会と關係するものと推定されている。つまり、設立時かまたはこれより少し後、この神戸の礼拝所で使われはじめたと推定されている。八曲の讚美歌の歌詞を木版で刷つたもので、宣教師オルチンの研究か無名の研究者によつて、四月に出版されたこと

になっているが、それはおそらく神戸に最初の教会が設立された四月を出版の日だとしたためであろう。

編者として名前があがっている日本人は、前田泰一である。グリーンは一八七三年三月頃、半分を書店に半分を礼拝所に使うために元町五丁目に家を借りたことは述べたが、書店主となって月二五ドルの家賃の半分を負担したのが前田であった。当時ベリーの日本語教師であった彼は、三田の出身であった。明治元年から四年まで三田藩知事であった九鬼義隆は福沢諭吉の影響もあって、開化政策を推し進めた。彼は一八七二年のデイヴィスとの出会いから急速にキリスト教に傾斜した。そのため、旧三田藩士から多くの信者を輩出することになった。前田もその一人であった。

摂津第一公会の主たる責任は、二十六歳の青年前田泰一の上にあるとグリーンは言い、「彼は非常に活動的な実業家で月約四十ドルの収入があります。現在の地位に選ばれたのは、かれがやがては牧師になるかもしれないという希望があつてのことです。彼は日本語と中国語の十分な教育があり、英語の知識も十分に持つており、かなり容易に注解書を読むことができます」とグリーンから評価された前田は、讚美歌の最初の翻訳者として適格な人物であった。

摂津第一基督公会が設立された同じ四月、前の年にアメリカン・ボードが最初に派遣した女性宣教師ミス・E・タルカットとミス・J・E・ダッドレーは、前田泰一の父である花隈村の前田兵蔵方に学校を設立した。後に洋楽の面でも拠点となった神戸女学院はここに出発する。この学校は翌年四月に、前田泰一と同様に三田出身の北長狭の白洲退蔵の持ち家に教室を移した。⁽⁸⁴⁾一八七四年五月十六日のタルカット書簡によれば、学校は二十四名の婦女子を擁するといし、⁽⁸⁵⁾六月二十日の書簡でダッドレーは「昨年十月に小さな学校を開きました。これは、年長の生徒たち(ほとんどが既婚婦人でございます)の出席が不規則なのですが、全部で三十名位を数えるかと存じます」と述べている。彼女らの授業は「唱歌と日本語でのお祈りに始まり、一時間もしくはそれ以上の英語のリーディングと会話の時間が続

き、日本語での旧約聖書の物語、讚美歌をもって終わるものであった。特に英語の唱歌は生徒間で最も魅力的な課目であった⁽⁸⁷⁾。

大阪ステーション

一八七二年七月十七日のギュエリック書簡が、彼が大阪から出した最初の手紙であり、九月二十四日にゴードン宣教師夫妻が横浜に到着し、大阪ステーションに着任したことはすでに述べた。翌一八七三年には、十月三十一日にデクスター宣教師夫妻が、十一月十五日にレーヴィット宣教師夫妻が加わった。H・H・レーヴィットは、梅花女学校の創設者と位置づけられている沢山保羅に感化を与えた人物として記憶されているが、音楽の面では「梅花女学校の創設に参画し、みずからも音楽科を担当した⁽⁸⁸⁾」。

大阪ステーションの讚美歌教育は、ゴードンとギュエリックの学校と、彼らの夫人が開いていた女性のためのクラスで一八七三年にはじまった。

十二月八日に大阪ステーション最初の独身女性宣教師M・E・グルデイが着任した。彼女が着任するまで「過去一年間のある時期」ギュエリック夫人とゴードン夫人が教えていた数人の婦人と子どもがグルデイに託されることになった⁽⁸⁹⁾。

数人が、わたしが到着してから一週間の間にやってきて、日曜学校讚美歌を英語と日本語で学んでいる。彼女たちは私たちの音楽を楽しんでいるようだ。

大阪の音楽教育活動は彼女を中心に展開して行くことになる。

音楽に熱心な生徒を前にして、彼女がまず考えたことは、オルガンを入手することであった。一八七四年五月十三

日の手紙でグルルディはこう書いている。

私はオルガンを手に入れようかと迷っています。秋になったら、私は、私たちにオルガンを送ってくれることに最も興味を持って
 いる人たちを訪ねなければならぬ。大阪には楽器が全くないのです。⁽⁹⁰⁾

グルルディがこのように書いた数日後、大阪ステーションでの活動の最初の成果として記念すべき日がやってきた。
 五月二十四日、大阪梅本町十番地に梅本町公会、後の大阪教会が設立された。⁽⁹¹⁾ 「高木玄真、安田三折、岩根幸助、
 山田荘三郎、杉山重義の五名の者がゴードンより受洗、柘植武憲、坪井仙次郎の二名が横浜公会より転入し」、大阪
 で最初の、アメリカン・ボードとしては二番目の教会が組織されたのである。

アメリカン・ボード日本ミッションの最も古い讚美歌集の一つ、通称『高木玄真筆写本』と呼ばれている手書き讚
 美歌集は、この教会の設立に関係づけられている。高木玄真は医師で、ゴードンからこの時洗礼を受けた五人の一人
 であった。神戸女学院のオルチン文庫所蔵のこの讚美歌集の表紙貼紙には、墨で「明治七年五月大阪教会設立サル／
 設立者ノ一人医師高木氏ノ自ら写シテ用イシモノナリ」とあり、鉛筆添書で“Used by Dr. Takagi one of the
 Charter / members of the Osaka Church. Used before / books were printed.”と記されているという（／は改
 行をあらわす）。また、表紙裏署名は、鉛筆で「D. Takagi」となっているらしい。⁽⁹²⁾

ミッションの年会で、讚美歌集に関して次の重要な決議がなされたのは、梅本町公会が設立されてから四日後の五
 月二十八日であった。

讚美歌のわれわれのコレクションをすぐに五十曲にすること。グリーン、ゴードン、ベリーの諸氏が出版のためにいくつか書
 き、選び、編集することを要請された。⁽⁹⁴⁾

ミッション活動が最初の成果を現しはじめ、教会が設立され、信者が日本語で讚美歌を歌いはじめ、日曜学校に集

まってくる婦人や子どもも讚美歌を歌い始めると、ポストンのミッション本部には、オルガンの入手希望が殺到するようになった。

七月二十二日のクラーク書記から、レーヴィット宛の書簡には、

オルガンを心に留めておく。買わなくてすむ自由になるオルガンは今是一台も所有していない。私は安く買うことができる。もしも経済的圧迫が軽くなったら、必ず買う⁽⁹⁵⁾。

という文面がみられる。慢性的赤字に悩んでいたアメリカン・ボードは、日本ミッションからのオルガンという新たな需要に対処するのに苦慮している様子が伺える書簡である。

オルガンが欲しくなったグールドイは、クラーク書記にはなく、ニューヨークのブッシュ博士にそれを要請した。このことが後でトラブルを引き起こすことになる。このトラブルは、また、当時、日本ミッションで急速に高まったオルガンの需要を反映したものと見るができる。

八月十日、ブッシュ宛にグールドイは次のように書いた。

京都に住む許可が得られなくてがっかりしています。この秋は大阪で一人で女学校を引き受けなければなりません。オルガンの必要をたいへん強く感じています。今のところ、それが送られてくるとは何も聞いていません。この春に届いたレーヴィット氏のものには長い船旅でかなり傷んでいました。ゴードン夫人のものも少し傷んでいました。大阪にある楽器はこれだけです。もしも、大きなサイズのメーソン・アンド・ハムリン「レゾナント」か、それとも重さが一三五ポンドで一七五ドルのもの、図入りカタログの二一番が手に入るようでしたら、太平洋郵便船で送ってください。(わたしたちの秋の品物などと一緒)。冬まで待つよりは、余分に支払います。こういったオルガンはサンフランシスコで売出し中です。もしもこの秋、大阪の女学校向けに楽器を送ることを計画している協会がないということが分かれば、エドワード・P・フリント氏を通じて自分で一台注文するつもりです。私は、協会に、彼女らの「セール」のためにここ日本でいつでも買いたい物をする用意があることを知らせたいと思います。横浜のブラインはアルパニーの婦人たちにそれを行ってとても得をした、ということ⁽⁹⁶⁾です。

何とかしてオルガンを手に入れようとするグールディの文面はさらに続く。

日本の学校のためのある協会に指定された一定額のお金があるようですが、特別の仕事の資金として現場に知られていいものなのかどうか、アメリカン・ボードはどう希望されているのでしょうか。例えば、メイン州支部の女性たちは、大阪の学校について次のように書いてよこしました。彼女たちはお金を出し、ボードはそれをこの学校に当てたと。もしもそのような資金がここにあったことを知っていて、他の学校からそれを使いたいという要望がなかったのなら、このお金でオルガンを一台買うことをミッションに頼んだのです。⁽⁹⁷⁾

グールディはオルガンの必要性を訴えるかのように、教会の盛況を伝える。

昨日、教会に四十人の日本人が出席した。キタムラさんが聖書を説明し、暑さにもかかわらず元氣よく歌われた。⁽⁹⁸⁾

有馬伝道集会

同じ夏、デイヴィス、ベリー、タルカットらは、避暑のため有馬ですごしていた。この地で開かれた伝道集会に讚美歌が普及する様子を見る事ができる。

「わたしどものまいましたのは美しいところで、およそ三一七七年の昔、將軍が湯治のために有馬にみえるときの宿所として、立派な調度をしつらえた寺院です」⁽⁹⁹⁾と書いているタルカットは、神戸に仕事を残して有馬に避暑にでかけることに最初気乗りはしなかったが、二日もするともうイエスについて話す機会を得たのを喜ばしげに報告している。彼らは、避暑のかたわら伝道集会を開いた。聴衆は少なかったが、讚美歌のめずらしさに婦女子が集まってきた。そして集まった彼女らに小さな讚美歌集が手渡された。八月二五日午後八時に開かれた集会では、旅客が十人くらい、婦女子が三十人くらい集まり、まず女性宣教師らによる讚美歌歌唱で始まった。このとき歌ったのは、タルカットの他に、ミクロネシアミッションのドーン宣教師の夫人もいたことであろう。タルカットは彼女について「ドーン夫人

はこちらにおいてになってから、いくらかよくなられました」と報告している。タルカットは特に音楽が堪能であった。ずっと後年のことであるが、大阪音楽大学を創設することになる永井幸次少年によれば、近くでタルカットの歌声を聞いた印象を「言葉が明瞭で声も綺麗」であったと述べている。集会は、その後、五十歳少しの老婆の讚美歌歌唱、祈禱、説教、祈禱、再び女性宣教師の讚美歌歌唱、祈禱、最後に女性宣教師の讚美歌歌唱で集会を閉じている。集会の後、デイヴィスがローマ字で書き下ろした伝道用小冊子『真の道を知るの近路』の他に、小讚美歌集が配布された。⁽¹⁰⁾

この時配られた小さな讚美歌集とは、おそらく八曲の讚美歌の歌詞を木版で刷った、まだ表題もない最初の讚美歌集であったろう。七月の終わりにすっかり疲れ切つてこの地に到着した医療宣教師ベリーは、二週間も休息するうちに健康を回復してきていた。この時、他の宣教師と一緒に廃寺の貸座敷に逗留していたベリーは、讚美歌集編集委員に任命されていたので、彼について学んでいた木村元広といっしょに、もつと日本人に歌いやすい日本語讚美歌の編集に苦勞していた。彼の苦勞は、歌三十三首讚詠六として十二月に上梓された。表紙には「いと高きにおいてはまれかみに地においてハをたやかめくみにんげんに」(ルカによる福音書第二章第一四節のクリスマスの天使たちの歌)という聖書の一節が刷られてあった。⁽¹¹⁾

この讚美歌集について、一八七五年五月の七四年度年次報告は「三九の讚美歌からなる、おそらく最初の日本語讚美歌集千部が発行された。前半部は横浜においてプレスビテリアンによって印刷されたものであるが、後半部は大阪において我々の伝道団によって成された。内輪の企てとしてそのローマ字版も(神戸において)印刷された(若山晴子氏記)」と報告した。⁽¹²⁾

大阪ステーションのオルガン

さて、話しをブッシュ博士にオルガンの手配を要請したグールディに戻すと、クラーク書記は、グールディのやり方に問題があることを日本ミッション書記のギューリックに十月三日の書簡で指示してきた。

あなた達のミッションに送ったオルガンがいくつか壊れた状態で受け取られたと聞いたが、工場の荷造りのせいなのか、それとも何か事故があったのか、原因について知りたい。どの製品が一番いい状態で届いたか、メーソン・アンド・ハムリン会社があなた達のミッションに贈ったものはどんな状態で届いたか知りたい。

ミス・グールディがブッシュ博士にウーマンズ・ボードのフィラデルフィア支部から得る積もりでオルガンを申し込んだ。ウーマンズ・ボードであれその他の支部であれ、書記の推薦なしにはこのようなことはしない。そのような申込みはミッションの承認を得てから私の所へ送るべきである。賛成があれば、その時は最善の努力でリクエストを実現するようにする。ミッションはグールディの要請に賛成しなかったのか。もし賛成したのなら、すぐに知らせたい。実現するよう出来るだけのこととする。メーソン・アンド・ハムリン社かスマイス・アメリカン・オルガン会社のもをサンフランシスコから一台直接送ることが出来ると思う。スマイス・アメリカン・オルガン会社なら、私は半分の値段で買うことができる。だから、もしも、どちらでもよければ、スマイスの方が望ましい。⁽¹⁰⁾

十五日には、クラークは、グールディに事情を通達した。

ブッシュ博士に宛てたオルガンに関するあなたの手紙は私のところへ転送された。送ったオルガンの災難を聞いて申し訳なく思っている。書記のギューリックに詳しい情報を送るように書いた。わたしは、会社から寄贈されたオルガンをもう一台も持っていないので送ることができない。しかし、このような楽器があなたの学校や教会の礼拝にとってどれだけ大切かよく分かるので、ミッションからわれわれの諮問委員会宛に、あなたに一台送って欲しいという要請がくるのを待っているところです。われわれの認可なしにウーマンズ・ボードがこのような場合行動することは規則にないことです。混乱のもとですし、資金の不公平な分配はトラブルになりかねません。あなたが言っていたのはメーソン・アンド・ハムリンですが、スマイス・アメリカン・オルガンズは、特別な友達として、一七五ドルのところを八〇ドルで提供してくれます。半分以上の値段です。⁽¹⁰⁾

アメリカン・ボード書記クラークと親しかったことから、スマイス・アメリカン・オルガン会社が、アメリカン・ボ

ードと結びついたのは一八七二年二月のことであったことはすでに述べた通りであるが、この結果、スミス・アメリカン社のオルガンがアメリカン・ボード日本ミッションの讚美歌教育に貢献することになった。

ボストンのトレモント通りにあったこの会社は S. D. Smith という名称で一八五二年に設立された。その後 S. D. & H. W. Smith として営業し、一八七四年以降 Smith American Organ Company となった。一八七二年までの累積生産台数は八千台で、一八八一年までが五万三千六百台となっている。⁽¹⁰⁷⁾ 日本ミッションと時を同じくして業績を急速に延ばした会社であった。現在日本に保存が確認されているものは、愛知県大山市にある明治村、聖ヨハネ教会堂にあるもので、製造番号は七七二三九番であるから、一八八六年に生産された一台である。⁽¹⁰⁸⁾

翌年、一八七五年の四月五日に、レーヴィット宣教師はボストンの本部に三台のオルガンを催促した手紙を書いた。これは当時の日本ミッションの音楽についての価値ある書簡なので長い引用をしておく。

以下のように、学校と教会に三台、キャビネット・オルガンを送ることをあなたに要請するように、日本ミッションのメンバーから指示されました。

一台は、大阪にあるミッションの教会用です。

もう長いことオルガンが欲しかったので、私は個人的にクラーク氏に出来るだけ早く一台送ってくれるように、書いてから一年にはなりません、手紙を書きました。その返事は、ボードがオルガンを購入できるようにならたら大阪には最初に送るといふものでした。知らされたところによると、後とでミッションから正式の要請がなかったので、遅れることになったようです。

教会は人目につく通りにあります。正面はいつでもすっきり開放つことが出来ます。これによって通行人に内部の礼拝に興味を持たすことが出来ます。しかし、効果的に行うには、礼拝を知らせるための何か、歌唱かオルガンが必要です。この目的のために大きな声で歌うというものは誰も出来ません。オルガンこそが、確かに、真実を聞く人の数を増やす手段として極めて経済的な手段です。こういった切実な理由の他に、音楽を導き、現地人の歌唱を訓練するためにどうしてもオルガンが必要なので、ついにゴードン氏は家で大切に使用してきた自分のオルガンを捧げ、ミッションのオルガンが手に入るまで教会に置いてくれました。

二番目のものはグールドイの学校用です。ミス・グールドイは、彼女が頼みさえすればオルガンが送ってもらえるものと理解していました。ニューヨークのブッシュ博士が、彼女が国を出る前にそう伝えていたのです。こう理解していたので、彼女はブッシュ博士の返事待っていたのですが、クラーク博士から返事がきて、ミッションからの正式な要請が必要だと言われました。遅れることを知って彼女はともがっかりしました。学校に集めようとしている婦人や子供たちを惹きつけ確保するために楽器がどうしても必要だと、彼女は感じていたからです。ミッションは、グールドイのオルガンの必要性はとも大きいと伝えるよう私に指示しました。オルガンは、誰が見ても、彼女の仕事をずっと楽にするでしょう。

三番目のものはミッションの兵庫の教会用です。

この前の十二月に兵庫に入る予定でした。しかし、手続きに不備があり、そのため入れませんでした。ついこの前、二月一日までにはきつと障害が取り除かれ、入れるだろうと思っていました。そうであってもなくても、時期はそんなに遠くなく、今はまだでも、ミッションは兵庫に教会を、人を集めるのに最も適した人出の多い通りに持つだろうし、その時、通りから聞こえる音楽、オルガンが教会へ足を踏み入れるのを躊躇する気持ちを取り払ってくれるでしょう。それゆえミッションの考えでは三番目のオルガンはとても役に立つだろうし、兵庫に入れるべきです。(中略)

と言うわけでオルガンをお願いします。もしも三台送るのがとても難しい状況でしたら、われわれが考えている送る優先順位は大阪が一番で、二番がミス・グールドイの学校で、兵庫が最後です。大きさに関しては、大阪教会のものは他の二つのものより大きい方がいいと思います。大阪はミッションの大きな中心地ですし、教会も大きくなるでしょう。ですから、重要なことは、この教会に合った大きさのオルガンが必要なのです。⁽¹⁰⁾

続けて、ギョーリックは、先に送られた来たオルガンの傷み具合についてクラークに報告している。今日のわれわれにとつては、この報告からさまざまなメーカーのオルガンが日本に入ってきて来たことが分かることが重要である。

オルガンの申込みに関連して、ボストンの書記からの呼びかけに従って、日本ミッション書記からそうするように要請されたので、日本に送られたオルガンに関する報告をつけ加えます。

送られてきたオルガンは、メーソン・アンド・ハムリン、ジョージ・ウッド、そして、現在、ベイ・ステート・オルガンとし

て知られているボストンのS・B・ハント・アンド・コーポレーションであるロード・アンド・クロケットです。

メーソン・アンド・ハムリンのオルガンはたい良い状態で到着するか、少なくとも簡単に修理できます。

ジョージ・ウッドも届きましたが、一つは良い状態でしたが、一つはかなり壊れていました。しかし、壊れたものも、比較的簡単に直り、無事機能しています。

ベイ・ステート・オルガンは、長い運送の梱包の経験がないせいで、製造者が修理部品を添えていたにもかかわらず使えないものにならないほど壊れていました。梱包に関しては安全に到着するように保証された別の物を用意するように、またこれから売る物については安全であるようにと、メーカーには私から楽器の状態について伝えておきました。(以下判読困難)

メーソン・アンド・ハムリン社のオルガンは日本で最も普及したオルガンの一つであるが、レーヴィット書簡にあるように輸送の安全性が普及の要因の一つであったであろう。

レーヴィットの要請は四月十三日にボードの諮問委員会で次のように決裁された。

大阪の教会とグールドの学校にオルガンを購入することを財務は認可した。^(III)

会議の様子が、ウオーチエスターからミッション書記ギューリック宛てに、同じ日付けで書かれている。

レーヴィット氏もまたミッションのためにオルガンを三台送るようというリクエストをした。一台目は大阪の教会用、二台目はミス・グールドの学校用、三台目は兵庫の教会用に。ご存じの通り、われわれは窮乏しており、今年の支出をおさえるために懸命に努力した。緊急の場合以外は今年ほしないように強く望んだミッションからの特別のリクエストによって、交付金は、われわれが守ろうとしている、あなたたちが見積もった総額を越えてしまっている。しかし、諮問委員会は、多少の不安はあるものの、この場合も要求の大部分を認めることに決し、楽器を二台送ることにした。二台は、レ氏が最も重要だと指示した、大阪の教会用とグールドの学校用である。兵庫の教会用のリクエストについては、少なくとも次に持ち越さなければならぬ。送られる楽器は、レーヴィット氏が考えているような、指定された二つの場所に適した十分なものである。^(III)

また、デイヴィスには次のように報告された。

十三日付けであなたのミッションのギュリック氏に手紙を出して、予告した。この前の会議でミッションから要求があった、はっきりしたものはっきりしないものも、種々様々な額を認可した。また、レービット氏からミッションのために要求があったオルガン二台も認可した。^(註)

この頃、一八七四年に来日し大阪で伝道したJ・H・デフォレストによって、ベリーが編纂した讚美歌集を増補改訂した『三びのうた』が出版された。木版活字をはじめて使用したもので、この歌集ではじめて曲名が記入された。^(註) また、ベリーの讚美歌のローマ字版『C.H.』も刷られた。^(註) さらに、十月には、六丁の最初の無題の讚美歌集が千部増刷された。^(註) すでに述べた有馬での伝道集会の時のように、集会ごとに集まった人たちに配布するための増刷であったろう。

京都ステーションの開設

「たぶん今秋には〔神戸から〕京都へ移れると思います。京都府顧問で視覚障害の山本は、この三年間、ミッションの友人ですが、〔キリスト教の〕真理に多大の関心を寄せるようになり、京都を福音に開放したく願っています。とりわけキリスト教の学校が設置されるべきであると願っています。彼と新島氏との感化で副知事もまた関心を示し、おそらく今秋、かの地に私たちのトレーニング・スクールを開校することが許されるでしょう(本井康博氏記)」とデイヴィスがクラーク書記に書いたのは、一八七五年七月十日であった。^(註) 書簡中に見えるトレーニング・スクールが同志社英学校で後の同志社大学である。同志社の創設はそのまま京都ステーションの開設を意味した。

京都ステーションの開設は、アメリカン・ボードの音楽教育にとっても大きな転機となった。開設された京都ステーションに、やがて、E・T・ドーンとA・J・スタークウエザーが来日し、ボードの音楽教育は飛躍的に進歩する

ことになった。また、京都ステーションが開設されることで、讚美歌教育がはじめて居留地の外で行われることになった。

スミス・アメリカン・オルガン会社がマイクロネシアの島々を巡回するモーニングスター号にオルガンを寄贈したことは最初に述べた。ドーンはマイクロネシアで活動した宣教師であった。彼はマイクロネシアでの歌唱教育経験をそっくり京都ステーションに持ち込んだらしい。やがてはじまる文部省の唱歌教育はドーンが開発した京都ステーションの讚美歌教育と深く結びつき、決定的影響を受けることになる。

が、しかし、これらについては稿を改めて述べることにする（未完）。

註

- (1) 中村理平「序論―研究史の整理―」（『キリスト教と日本の洋楽』大空社、一九九六年）五―一頁参照。
- (2) 中村理平「キリスト教と近代日本の洋楽」（『キリスト教と日本の洋楽』大空社、一九九六年）三七七―三九一頁。
- (3) 山住正己『唱歌教育成立過程の研究』（東京大学出版会、一九六七年）二一頁。
- (4) 安田寛『唱歌と十字架』（音楽之友社、一九七三年）。
- (5) 「L・W・メーンソンの再来日計画とアメリカン・ボード日本ミッション」（『キリスト教社会問題研究』第四四巻、一九九五年）一〇五―一二七頁。
- (6) 若山晴子「明治初期讚美歌に関する史料蒐集―米国伝道会宣教師文書に見る―」（秋山憲兄編『覆刻讚美歌并楽譜解説』新教出版、一九九一年）二九―四二頁。
- (7) 若山晴子「ウィリアム・ウイリス・カーティス師の生涯」（秋山憲兄編『覆刻讚美歌并楽譜解説』新教出版、一九九一年）四三―六七頁。
- (8) 越川美都子「明治初期讚美歌研究―七一雑報の記事を中心に―」（東京芸術大学、卒業論文、一九九二年）。
- (9) 中村理平『洋楽導入者の軌跡―日本近代洋楽史序説―』（刀水書房、一九九〇年）。
- (10) 中村理平、前掲書。

- (11) "From the Rev. N. G. CLARK, D. D., Secretary of the American Board of Commissioners for Foreign Missions. Returning from New York a few days since, among the greetings that met my ears from my little girl was, "The Organ has come!" Inquiring where it was, I was told it was in the "music room." This was a new place to me; but I soon learned that my study, adjacent to the parlor, had been so named in honor of its new occupant. Beside the pleasure and profit to my own family, I trust it will be of no little value to our missionary gatherings. Letters recently received from Micronesia speak in glowing terms of the delight it gave the party on board the Morning Star, as she fitted from island to island, a symbol of the Christian culture of our favored land." "The American Organ; A short account of its construction and qualities, and a descriptive list of the various styles." Boston: The Smith American Organ Company. 444' ヲシ音楽や贈送レトレカカ' マトヘトシ無難クヤリ義長レカ' カ赤井園氏ヨリ贈レタリ
50
- (12) *ibid.*
- (13) Goodsell, Fred Field. *You shall be my witnesses.* Boston: American Board of Commissioners for Foreign Missions, 1959. p. 287, 293.
- (14) "Rev. N. G. Clark, D. D., LL. D." *Missionary Herald* February 1896: 51-53.
- (15) "Smith Am. Or. Comp'y. The Foreign Secretary stated that the Smith American Organ Company had given an excellent organ as a part of the equipment of the new Morning Star, whereupon it was, "Resolved, that the thanks of the Prudential committee be tendered to said company for their valuable donation." Prudential Committee, Minutes (ABCFM) 1810-1966, Microfilm, Reel 5.
- (16) Gellerman, Robert F. *Gellerman's International Reed Organ Atlas.* New York: The Vestal Press Ltd, 1985.
- (17) ヲカビシシツカ' 赤井勲『オネンガンの文化史』(書肆社' 一九九五年)が参考となる。
- (18) "I have one of Mason and Hamlin's fine organs left. Shall I send it to Japan? (This last sentence is to you as Secretary of the Mission.) Can you make good use of it now, or soon?" N. G. Clark's letter to O. H. Gulick, 1872. 11. 20 (Reel 24 vol. 39.)
- (19) J. A. コーネ『日本伝道二十五周年』(大阪女学院' 一九七八年)一七頁。

- (20) "My class of girls improve & I hope will become Christian women. They have learned a part of the fifth chap. of *Matthew* in English and Japanese, the Lords prayer, & many hymns. I think they would learn to sing well with a proper instruction." Mrs. J. C. Hepburn's letter, 1869. 6. 29, Records of U. S. Presbyterian Mission, Japan Letters 1869-1873 (Japan vol. 2.)
- (21) 手代木俊一「ジョージ・オルチン師の日本における讚美歌全訳」(『フェリス論叢』第三号、一九八六年)一二頁。
- (22) Green, M. F. "Reminiscences", *Mission News* 15 February 1910: 91.
- (23) 手代木俊一、前掲論文、一二頁。
- (24) 榎本義子「ミス・キダーの手紙(一一)」(『あゆみ』第一二号、一九八三年)三六一—三七頁。
- (25) *ibid.*
- (26) *ibid.*
- (27) 榎本義子「ミス・キダーの手紙(一二)」(『あゆみ』第二号、一九七八年)一三頁。
- (28) 小檜山ルイ『アメリカ婦人宣教師 来日の背景とその影響』(東京大学出版会、一九九二年)六三—七〇頁。
- (29) 「横浜共立学園一二〇年の歩み」編集委員会編『共立一二〇年の歩み』(横浜共立学園、一九九一年)二七頁。
- (30) 坂本清音「同志社女学校婦人宣教師の場合」(『外国人教師の目に映った百年前の同志社』人文研ブックレット No. 三、同志社大学人文科学研究所、一九九五年)三八—三九頁。
- (31) 坂本清音、同右、四一頁。
- (32) 榎本義子、前掲論文、一四—一五頁。
- (33) *ibid.*
- (34) *ibid.*
- (35) 手代木俊一、前掲論文、一二—一三頁。
- (36) 「謀者正木護の耶蘇教探索報告書」(小沢三郎著『幕末明治耶蘇教史研究』一九四四年)二八一頁。
- (37) *ibid.*
- (38) Pruy, Mrs. Mary. *Grandmother's Letters from Japan*. Boston: James H. Earle, 1877. p. 57-58.
- (39) 「高木三郎氏談」(小澤三郎著『幕末明治耶蘇教史研究』日本基督教団出版局、一九七三年)二五九頁。

- (40) 榎本義子「ミス・キダーの手紙(三)」(『あゆみ』第三号、一九七九年)二八―二九頁。
- (41) 同右、三二頁。
- (42) 高谷道男『S・R・ブラウン書簡集』(日本基督教団出版局、一九六五年)二七〇頁。
- (43) 「譯者正木護の耶蘇教探索報告書」(小沢三郎編『幕末明治耶蘇教史研究』一九四四年)二八七頁。
- (44) 同右、二八八頁。
- (45) 横浜共立学園六〇年史編纂委員編『共立学園六〇年史』(一九三三年)一六一頁。
- (46) 同右、一六二頁。
- (47) 横浜共立学園六〇年史編纂委員編、前掲書、一六二頁。
- (48) フェリス女学院『キダー書簡集』(教文館、一九七五年)五五頁。
- (49) 榎本義子「ミス・キダーの手紙(五)」(『あゆみ』第六号、一九八〇年)二六一―二七頁。
- (50) 小檜山ルイ、上掲書、一九〇頁。
- (51) 同右。
- (52) 伊沢修二君還曆祝賀会『樂石自伝教界周遊前記』(一九二二年)一四頁。
- (53) Carrothers, Mrs. Julia D. *The Sunrise Kingdom; or, Life and Scenes in Japan, and Woman's Work for Woman There*. Philadelphia: Presbyterian Board of Publication, 1879.
- (54) *ibid.*, p. 158.
- (55) *ibid.*, p. 159.
- (56) *ibid.*, p. 159-161.
- (57) *ibid.*, p. 161.
- (58) 小檜山ルイ、前掲書、一九二頁。
- (59) Carrothers, Mrs. Julia D., *ibid.*, p. 161.
- (60) 小沢三郎『日本プロテスタント史研究入門』(東海大学出版会、一九六四年)二二二頁。
- (61) 山川菊栄『おんな二代の記』(平凡社、一九七二年)一七頁。
- (62) Carrothers, Mrs. Julia D., *ibid.*, p. 183.

- (63) *ibid.*, p. 199.
- (64) *ibid.*, p. 201-202.
- (65) *ibid.*, p. 324.
- (66) この時代のアメリカン・ホード日本ミッションの宣教活動については、茂義樹『明治初期神戸伝道とD・C・グリーン』（新教出版社、一九八六年）が参考となる。
- (67) “In regard to the “fine Mason & Hamlin organ”, it is the unanimous opinion, that it is wanted, and that it will be very useful at once. It is the unanimous opinion of those at Osaka, that it is needed here, and it is the unanimous opinion of the Kobe brethren, that it will be of immediate use there. If possible, please send us two, one for Kobe, and one for the Osaka station!”
- The Japanese are very fond of our style of music, and very readily learn to sing. Mr. Ballagh has made a successful beginning of translating Sabbath School hymns into the Japanese language. These I use daily in my morning scripture reading with the Japanese.” O. H. Gulick's letter to N. G. Clark, 1873. 1. 16 (Roll 4, 381.) Roll は同社大学人文科学研究所蔵のアメリカン・ホード宣教師文書マイクロフィルムのリール番号、その後の番号は書簡番号。
- (68) 手代木俊一、前掲論文、一七頁。
- (69) “We have fixed up a neat room for meeting room and school room, upon Dr. Gordon's premises, capable of seating 40 persons.” O. H. Gulick's letter to N. G. Clark, *ibid.*
- (70) 茂義樹、前掲書、一五〇—一五三頁。茂義樹「大阪の初期キリスト教伝道—会衆派教会を中心として」（堀田暁生、西口忠編『大阪川口居留地の研究』思文閣出版、一九九五年）二二八—二三三頁。
- (71) “I shall direct one of Mason and Hamline's organs to be sent to the mission. You must agree among yourselves as to its location. We have only one more, and this is the last, which I have been holding back for Japan.” N. G. Clark's letter to O. H. Gulick, 1873. 2. 28 (Reel 24, vol. 39). Reel は同社大学学術情報センター所蔵のアメリカン・ホード宣教師文書マイクロフィルムのリール番号、その後の番号は書簡番号。
- (72) 茂義樹「D・C・グリーンの手紙（Ⅳ）」（『梅花短期大学研究紀要』第二四号、一九七五年）六九頁。
- (73) “The attempts made by several members of different missions, with varying success, at composing and translating

hymns, has given reason to expect that we may in time have in Japanese hymns a collection of the treasures of refined Christian sentiment such as in more favored lands is garnered in sacred song." Annual Report of the Mission to Japan for 1873. (Reel 327, No. 8.)

- (74) "In September singing was introduced into the services and formal preaching commenced." Report of Kobe Station 1874 (ABC/FM Correspondence, Reel 327, Japan Mission 1869-1890, No. 51.)
- (75) 村上俊吉『回顧』(警醒社、一九二二年)六七頁。
- (76) 茂義樹、前掲書、五四頁。
- (77) 茂義樹「D・C・シリーンの手紙(VI)」(『梅花短期大学研究紀要』第二十六号、一九七七年)一五八頁。
- (78) 茂義樹、前掲書、一二二頁。
- (79) "The Mason & Hamlin organ, received, is a very fine instrument, and is duly appreciated, being a great attraction to those who attend the Sabbath-services in Kobe." O. H. Gulick's letter to N. G. Clark, 1873. 11. 12 (Roll 4, 399.)
- (80) 村上俊吉、前掲書、六七一六八頁。
- (81) 茂義樹「D・C・シリーンの手紙(VI)」同右、一七一頁。
- (82) 同右、一七二頁。
- (83) 同右、一七三頁。
- (84) 神戸女学院百年史編集委員会編『神戸女学院百年史』総説(神戸女学院、一九七六年)二〇頁。
- (85) 若山晴子、鈴木恒弥「タルカッタ書簡―訳および注(一)」(『神戸女学院大学論集』第二四卷第三号、一九七八年)八一頁。
- (86) 若山晴子「タッドレー書簡―訳および注(一)」(『神戸女学院大学論集』第二八卷第三号、一九八二年)六五頁。
- (87) 神戸女学院百年史編集委員会編、前掲書、二二頁。
- (88) 梅花学園九十年小史編集委員会編『梅花学園九十年小史』(梅花学園、一九六八年)三〇四頁。
- (89) "A few women and girls have been instructed by Mrs. Gordon and Mrs. Gulick during a portion of the past year. On the arrival of Miss Gouldy they were transferred to her charge." Osaka Station Report, 1874. 5. 26 (Reel 327, No. 60.)

- (36) "The few who have been coming since the first week after my arrival learn Sunday School hymns as we have these in English & Japanese. They seem to enjoy our music, and I am wondering whether I shall have the organ which was mentioned when Fall came I must visit to those who are most interested in sending these out for us yet we have no musical instrument in Osaka." M. E. Gouldy's letter, 1874. 5. 13 (Roll 30, 81.)
- (37) 鈴木浩二編『大阪基督教伝説沿革略史』(大阪基督教会、一九二四年)二頁。
- (38) 茂義輝『祖傳書』一三三三頁。"And it is with hearts overflowing with gratitude to God that we inform the organization of our first church in Osaka on Sunday May 24th consisting of seven members. Five on profession of faith and two by letter." Osaka Station Report. 1874. 5. 26 (Reel3 27, No. 60.)
- (39) 秋山壽兄『覆刻明和邦語辞書美談解題』(新教出版社、一九七二年)六六頁。
- (40) "That our collection of hymns be increased as soon as possible to fifty & that Messrs. Green, Gordon & Bery be requested to write, select & arrange to some for publication," Minutes, Annual Meeting, 1874. 5. 28 (Reel 327, No. 16.)
- (41) "I note what you say of an organ. We have none now at our disposal, save as we purchase. I can buy one at reduced rates, and if our financial stress abates a little I will have it in mind." N. G. Clark's letter to Leavitt, 1874. 7. 22 (Reel 25, vol. 41.)
- (42) "As we are disappointed in not being permitted to live in Kiot. I must take charge of the girls school in Osaka alone this Fall. We shall feel the need of an organ very much. But as yet I have not heard of any on the way. Mr. Leavitt's came in the Spring utterly pained by the long sea-voyage and Mrs. Gordon's is also somewhat impaired. These are the only instruments in Osaka. If I may have a large size "Resonant" Mason & Hamlin or Style no. 21 marked in the illustrated catalogue \$ 175. 00 weight 135 lbs sent out by Pacific Mail Steamer (with our Fall goods & c.) I will meet the extra expense myself rather than wait till the winter weather set in. These organs are for sale in San Francisco, so if I may know that no society is planning to forward an instrument this Fall for the girls school in Osaka I will order one at my own expense through Mr. Edward P. Flint. I should like the Societies to know that I am willing at any time to make purchases for their "Sales" here in Japan. Mrs. Fryn of Yokohama does do for the ladies of Albany with great profit, I am told." M. E. Gouldy's letter to Dr. Bush, 1874. 8. 10 (Roll 3,

162.)

- (97) "Please tell me whether it is expected by our American Board that certain money appointed to certain societies for schools in Japan shall be known in the field as a fund for the special work. For instance, the ladies of the Maine branch have written to me in reference to the school in Osaka saying that their money is given and the Board have appropriated it to the school here. If we knew of such a fund here and it was not required for other school uses, I should have asked the mission to purchase an organ out of this money." *ibid.*
- (98) "We had about forty Japanese at church yesterday. Kitamura san explained the Bibles and the singing was spirited notwithstanding the heat." *ibid.*
- (99) 若山晴十、鈴木恒弥、前掲論文、八九頁。
- (100) *ibid.*
- (101) 永井幸次『来日方八十年』(大阪音楽短期大学音楽友会出版部、一九五四年)七頁。
- (102) 武藤誠「神戸地方に於ける基督教育史の一考察」(『関西学院短期大学英文科論叢』第一号、一九五二年)七八頁。
- (103) 神戸女子学院図書館『キリシタン文庫目録—日本基督教史資料—』(神戸女子学院図書館、一八七九年)九頁。
- (104) "A thousand copies of a Hymn Book consisting of thrifty nine hymns, probably the first hymn-book in the language, has been issued; the first part of which was printed by the Presbyterian Mission in Yokohama, and the latter portion executed in Osaka by our Mission. The same has also been printed in Kobe in Romanized Japanese, by private enterprise." Annual Report of the Japan Mission, May 1875 (Reel 327, No. 9.)
- (105) "I have heard that some of the organs sent your mission were rec'd in a damaged condition. I wish to know whether the manufacturers were at fault in packing them, or what the trouble and its cause? [was] Whose make came in the best condition? In what condition did you receive the one given to your mission by the Mason & Hamlin Organ Co.? Miss Gouldy has applied to Dr. Bush for an organ, hoping to get it from the Philadelphia Branch of the Woman's Board. The Woman's Board or their Branches do nothing of the kind unless recommended from the Secretaries. Such applications should be endorsed by the mission, and then sent to me, when, if approved, every effort will be made to carry out the request. Does the mission approve Miss Gouldy's request? If so, please inform me,

and I will secure it if possible. I think I can send one direct from San Francisco, either Mason & Hamlin or the Smith American Organ Co's. The Smith Am. Organ Co., I can get at half price; hence if equally desirable, should prefer to get the Smith's." N. G. Clark's letter to Rev. O. H. Gulick 1874. 10. 3 (Reel 25 vol. 41.)

- (91) "Your letter to Dr. Bush in reference to an organ was passed to me. I am sorry to hear of such disaster to the organs sent out, and I have written to the Secretary, Mr. Gulick, for further information. We have now no more organs to send out, as the gift of the manufactures. But I fully appreciate the value of such an instrument to your school and to the church service, and only wait to hear from the mission to ask our Com. to send you one. It is not in rule for the Woman's Board to act in such cases without our sanction, as confusion would arise, and an unequal distribution of funds might make trouble. You speak of Mason and Hamlin's instruments. Smith American Organs are furnished me, as a particular friend, at \$80 for an \$175 instrument, less than half price. Some prefer one, and some another. I am sorry you are to be left alone. Have you not some friend, whom you can call to your aid? If so, name the one and I will do my best to send her to you." N. G. Clark's letter to Goudly, 1874. 10. 15 (Reel 25 vol. 41.)

- (92) Gellerman, Robert F. *Gellerman's International Reed Organ Atlas*. New York: The Vestal Press Ltd., 1985, p. 121. (赤井勵氏の教示)。

- (93) 佐藤泰平「日本の古リードオルガン—現存する明治・大正・昭和初期のリードオルガンをたずねて—」(『立教女学院短期大学紀要集』第二十六号、一九九四年)一三三頁。

- (94) "I am instructed by the members of the Board's Mission to Japan to request you to send them three cabinet organs for use in schools & chapel as follows,
1st one for the mission chapel at Osaka.

The need of this has been long felt so that I appealed to Sir. Clark in a private letter written a letter less than a year ago, to send us one as soon as possible. He replied to that appeal that as soon as the Board were in condition to purchase organs Osaka should be one of the first supplied. The lack of a formal request by the mission, we were told, later was the cause of delay.

Osaka should be sent first that for Miss Gouldy, second & the Hiogo, last. As respect size that for the Osaka chapel should be larger than either of the others. Osaka is likely to be a large mission center & ch. will be large. It will be important that we have an organ of suitable size for a chapel there." H. H. Leavitt' letter to the Sec'ys A. B. C. F. M., 1875, 4. 5 (Roll 5, No. 153)

- (三) "In connection with this application for organs, I will add a report on the organs sent to Japan as requested by the Sec. of the Japan Mission to do, in accordance with a call from the Sec. in Boston to that effect.

The organs sent out have been from Mason & Hamlins, George Woods, & Lord & Crockett now S. B. Hunt & Co. of Boston known as the "Bay State Organ."

The Mason & Hamlin organs have usually been in good condition upon arrival or at least so as to be easily repaired.

The George Wood organs have come; one in good condition & one broken considerably, but the broken one was mended with comparatively little trouble works well.

The "Bay State Organ", in consequence of inexperience in packing for long shipment, was broken so as to be useless unless parts to repair it were furnished by the builder. The makers were informed by me of the condition of the instrument when they at once furnished me with another guaranteeing its safe arrival so far as packing is concerned & will do the same for any they sell in the future." *ibid.*

- (三) "Organ for Osaka & Miss Gouldy's school. The Treasurer was authorized to purchase an organ for the chapel at Osaka, as also one for Miss Gouldy's school." Minute of Prudential Committee, 1875, 4. 13 (Prudential Committee. Minutes (ABCFFM) 1810-1966. Microfilm. Reel 5.)

- (三) "Mr. Leavitt, in behalf of the mission, has also presented a request for three organs to be sent, (1st) one for the chapel at Osaka; (2d) one for Miss Gouldy's school; and (3d) one for a chapel (to be) at Hiogo. You know our poverty, and how earnestly we have labored to keep our expenses for this year within limits which we might hope to reach in our receipts. You know also that special requests from your mission such as we urgently desired the missions not to make this year, except in cases of imperative necessity, have already carried your grants for the

- beyond the whole amount asked in your estimates from which we tried to get off a little. But, not without some misgivings, the Com. have voted in this case also to grant most of what is asked and to send two instruments—the two designated by Mr. L. as most important,—for the chapel at Osaka and for Miss Gouldy's school. For that requested for the chapel at Hiogo, you must at least wait till another year. Such instruments will be sent as Mr. Leavitt considers suitable and sufficient for the two places designated." I. R. Worcester's letter to Rev. O. H. Gulick, 1875. 4. 13 (Reel 25, vol. 41.)
- (13) "I wrote to Mr. Gulick of your mission, on the 13th inst., announcing that our committee had granted the various sums, certain and uncertain, asked by the mission at its recent meeting, and also two of the organs, asked in behalf of the mission by Mr. Leavitt." I. R. Worcester's letter to J. D. Davis, 1875. 4. 15 (Reel 25, vol. 41.)
- (14) J・H・ユニオンスト『三つの心』(一八七五年の)「四〇冊 歌謡のそと」一七下 神戸女学院所蔵、基督教中央図書館所蔵(異版)。
- (15) Rev. J. D. Davis 訳『Uta』(神戸、一八七五年の)歌三三、讃詠六、四八頁。神戸女学院所蔵、「讃美歌」(いと高きとそと)のローマ字版。
- (16) 若山晴子「明治初期讃美歌に関する史料蒐集—米国伝道会宣教師文書に見る—」(秋山憲兄編『覆刻讃美歌 楽譜解説』東京・新教出版、一九九一年)三三三頁。"Report of the Publication Committee, presented May 27, 1876." *Annual Report of the Japan Mission, May 24, 1876.*
- (17) J. D. Davis' letter to N. G. Clark, 1875. 7. 10 (Roll 2, No. 225.)